

地元の木々を活用し、地域経済を循環させたい。 「大阪 森の間伐紙」が サステイナブルな世界をつくる



大阪を拠点とする紙の専門商社、株式会社シオザワの発案から、山陽製紙株式会社と平和紙業の3社が協力しあい、サステイナブルな紙づくりに挑戦しました。その名も「大阪 森の間伐紙」。大阪府内の森林で計画的に伐採された「間伐材」を粉末にして紙の原料であるパルプに加えた混抄紙(こんしょうし)※です。

日本の森林面積は、戦後、大規模な植林によって国土の約7割にまで広がりましたが、安価な輸入木材が建材として活用されるケースが増え、国内の森は伐採されずに放置され、荒れてしまっています。

森を健やかに保つためには、間伐をして若木を育て、森の若返りを図る必要があります。今回は、森を守り、環境を守る力となる「大阪 森の間伐紙」ができるまで、そして今後の展望について企画・製造に深く関わった3社で語り合います。

※混抄紙 紙の原料であるパルプに異質な繊維を混ぜ合わせて抄いた紙のこと

プロフィール

大自然によって生かされて働ける今に感謝し紙を媒体とした情報文化創造企業として、

明るい温かい楽しい社会づくりに参加する

株式会社シオザワ 塩澤 有紀 さん

紙創りを通してお客様と喜びを共有し、環境に配慮した循環型社会に貢献する

地球の財産を生かし、自然と共に生きる製紙会社

山陽製紙株式会社 長谷川 将之 さん

風合い豊かな紙「ファンシーペーパー」をつくり、届け、

持続可能な社会づくりに寄与し、情報社会の中で新たな価値の構築する

平和紙業株式会社 本多 守

「未来を拓く仕事をしたい」

その思いが「間伐材」という資源を見出した

塩澤：「大阪 森の間伐紙」のはじまりは、「シオザワで働く社員が、子どもたちに誇れる仕事ってどんなものだろう。未来を拓いていける仕事ってなんだろう」と考えていたことでした。

株式会社シオザワは、紙の専門商社として大量の紙を販売してきました。ただ、デジタル化の流れでコピー用紙、印刷用紙の需要は減少し、紙を使うことは非効率というイメージも広まっています。さらに、たくさん流通している紙は価格競争も激しく、社員たちは終わりのない競争に巻き込まれている。売上確保だけを目指して大量販売を続けるだけでは、この先、おそらく誰も幸せになれない。

僕らが価値観を変えて、未来のために何ができるかを考えないと…そんな思いが、コロナ禍を経て強まりました。

本多：塩澤さんとは日頃からよく話をする間柄なので、「未来のためになる仕事」を模索し始めたことも聞いていました。いろいろと調べる中で、間伐材に注目されたんですね。



大阪にある間伐材（千早赤阪村）

塩澤：本多さんは環境への意識も高く、以前からSDGsや森の保全といった話題について話をしていました。森を健康やかに保つためには「間伐」という作業が必要です。生い茂った木々を計画的に伐採すると、日光が地面に降り注ぎ、下草が生え、新たな木々が育っていきます。さらに、陰に隠れていた若木に日が差すと光合成が促進され、二酸化炭素の吸収も進むので地球温暖化防止につながります。

間伐によって生まれる「間伐材」を有効活用してお金に変えることが、計画的な間伐を進める力になります。それなら、間伐材で紙をつくれませんか。その紙で得た収益の一部を、地域の森林育成や保全活動に使ってもらえば、地域経済にも環境保全にも良い循環を生み出せるのではないかと。

そんなことを考えて、森の管理をされている大阪森林組合に「間伐材で紙をつくりたい」とお話しに行きました。森林組合の方にはびっくりされましたが、「やってみようか」と間伐材を分けてくださったんです。

そのあと、本多さんと長谷川さんに、パルプに「大阪の間伐材」を混ぜ込んでつくる「混抄紙（こんしょうし）」を形にしたいとご相談しました。

地方を元気にしながら、環境を守れる仕事になる。

3社を動かした、次世代への使命感

本多：塩澤さんのお話を聞いた瞬間、面白い、やってみたい。と思いました。大阪を拠点とする3社がタッグを組んで、地域を元気にできる取り組みですからね。また、2025年に開催される大阪万博の活動テーマのひとつが「地産地消の創出・支援」であり、そのあたりでも時代にマッチした製品になるのではと予感しました。

長谷川：僕も、塩澤さんから相談していただいてめちゃめちゃうれしかった。熱が伝わってきたんですね。僕も暑苦しい男なんで(笑)。やらせてください!! と即答しました。山陽製紙には、精神的なよりどころとして「縁をつなぐ・心をつなぐ・歴史をつなぐ」という「山陽スピリット」が定められています。

シオザワさん、平和紙業さんにいただいたご縁をつなぎ、3社が心をつないで社会に役立つ紙をつくる。自分たちの仕事で地球環境を守り、次世代へ歴史をつなぐ。山陽スピリットそのもののような仕事に携われることが、とにかくうれしかったですね。

本多：塩澤さんの熱は、伝染するんです(笑)。個人的な話をすると、私は、地方と中小企業が元気になるれば日本が元気になると信じていて、ペール缶を使って煮炊きできる「ジェット(ロケット)ストーブ」の作り方を限界集落地で教えるという活動をしています。災害やなにかの事情でインフラが止まって、自然の中で生き抜く状況になっても、温かいものを食べて地方の人に元気でいてほしい。そんな想いで始めた活動です。

今回の間伐材の故郷は、千早赤阪村(ちはやあかさかむら)という大阪唯一の村です。千早赤阪村はもちろん、山陽製紙さんの工場がある泉南市も、都心に比べたらずいぶん田舎です。この「大阪の間伐紙」が、少しでも地域内の経済を循環させ、地方や中小企業の活性化につながったらという思いがあります。

塩澤：山陽製紙さん、平和紙業さんはわたしたちの会社と、近い理念を持っていることもあって、3社の根っこの想いが近いんです。自然へ感謝し、次世代に残したい未来を意識しながら働いているので、一緒にプロジェクトを進めていてすごく心強かったです。



今回のプロジェクトで生まれた「大阪 森の間伐紙」

地元の協力を得てつくられた「大阪 森の間伐紙」が 新たな出会いとプロダクトを生み出した

長谷川：「大阪 森の間伐紙」は、大阪の森で伐採されたスギやヒノキを粉末にして、パルプに混ぜ込んでつくっています。理想的な粉末にできるかわからなかったのですが、実現できるか心配でしたが、まず「やらんとあかん」という想いが先にありました。ただ、異素材である間伐材を混ぜ込むのに費用がかかることは間違いなかった。シオザワさん、平和紙業さんの協力をいただいて、なんとか実現できました。

今回、間伐材を粉末にしてくれたのは千早赤阪村の小松製粉さんです。以前、別のお仕事でご縁ができた会社と、間伐材の地元という地縁も活かしながら「間伐紙」をつくれるとわかってうれしかったですね。間伐材を乾燥して粉碎するのに1ヶ月くらいの期間が必要で、製造までに2ヶ月ほどかかりました。木材は生き物なので、時季によって質が変わり、粉碎してみないとどのくらいパルプに混ぜられるかもわかりませんでした。現在は、平均すると「大阪の間伐材」が、紙の中に約20%抄き込まれて使われています。

塩澤：山陽製紙さんにはご苦勞をおかけしたので、完成したときはほっとしたし、うれしかったですね。ただ、使命感に駆られてつくったものの「大阪 森の間伐紙」は印刷適性が高いわけではないし、「我々の思いに共感して、この紙に興味を持ってくれる人はいるのか……」という不安も感じていました。

でも、僕らの想像以上に紙を扱うクリエイターさんからの評判が良かったんです。多くの方がサステナブルな紙、環境に配慮された商品、想いを持って生み出されたものを求めているんだと改めて実感しました。2021年10月、あるイベントで「大阪 森の間伐紙」についてプレゼンしたのですが、当社のブースにひっきりなしにデザイナーさんが来てくれて、その中の3名の方と「間伐紙」を使ったグッズ開発を始めることができました。

グッズの中でも僕が気に入っているのが「大阪 森の間伐紙ものがたり」という絵本。戦後、大規模な植林で生まれた大阪の森の歴史から始まり、森の大切さを伝えるお話です。子どもの頃から、身近な森がどれだけ大切な資源かを感じてもらえたらうれしいですね。



「大阪 森の間伐紙」とクリエイターがコラボレーションして誕生したプロダクト

森を守り、次世代に美しい自然をつなぐ。 地域経済循環のモデルケースを、 ここ大阪から

塩澤：この先は「大阪 森の間伐紙」を広めていく段階です。まず、「間伐紙」のノートを地元の子どもたちに使ってもらうことで、森林保全への関心を高めてもらえたらうれしいですし、「間伐紙」を「紙育」にも活用していきたいですね。アナログな紙から入ってくる情報は、タブレットで見る情報とはひと味違います。この先、紙の価値を高めるためにも「地域の森から生まれた間伐紙」を使いたいです。

本多：大阪森林組合の河内長野支部では、小学生向けの林業体験をしているそうで、その際に使う「かわちながの森林BOOK」という教材を、「間伐紙」でつくりたいという要望もいただいています。日本は7割が森林。「大阪 森の間伐紙」が生み出す地域経済循環モデルが全国にも展開できたらうれしいですね。

長谷川：「価値のある紙ってなんだろう」と考えると、「環境にやさしい紙」というのは有力な答えだと思います。子どもたちに、笑顔で楽しく生きられる環境を残すことがわたしたちの使命。やっぱり暑苦しいんですけど(笑)、3人は同じ気持ちだと思います。

本多：「間伐紙」の話のはずが、森の話で熱くなっちゃいましたね(笑)。

塩澤：ほんとですね(笑)。「大阪 森の間伐紙」の製造と活用を進めていくことが、「子どもたちに誇れて、未来を拓ける仕事」なんだと今は感じています。まだまだ、わたしたちにできることがあると信じ、3社で一緒に頑張っていきたいです。



山陽製紙 長谷川さん（左） 株式会社シオザワ 塩澤さん（中央） 平和紙業 本多 守（右）